資料３－５

県内外 NPO からの聞き取り結果

新計画策定にあたり、令和６年４月～６月に県内外の女性支援等に携わる NPO を訪問し、支援の現状等について聞き取りを行いました。
主な意見は下記のとおりでした。

【行政への要望・意見】
・厳格なルール等により、行政との連携が困難だったケースがあるため、もっと柔軟な対応にしてほしい。

（具体な意見）
・行政が NPO と連携する際は、要支援者の情報を適切に引き継いでほしい。
・行政のルールが厳格過ぎるため、円滑な連携の妨げとなっている。
・夜間時の保護案件等において、行政があまり機能しないことがある（頼れるのは警察だけ）。
・行政がルールに縛られすぎて対応しきれない部分があるならば、民間に棚卸してほしい（退勤時間の制限等があり、途中から NPO へ丸投げというケースあり）。
・行政は、要支援者に対して、すぐ保護しようとしたり、家へ帰らせようとしたり、といった対応をしがち。寄り添った対応が出来ていない。なお、行政がしがちな一時保護は、根本的な解決方法になっていない。保護されて、その後に家に帰ってきても、その家の状態が変わりなければ意味が無い。
・要支援者の中に、女相や児相等の行政機関に対して拒否感を示す者が一定数存在しているので、柔軟な対応が求められる。

・居場所を作ってほしい。

（具体な意見）
・NPO は活動場所に困っており、支援を活性化するためにも NPO が運営する場所が必要。
・その場所に来れば一括で支援を受けられるような、包括的な支援の場が必要。多機能の居場所が必要。
・三重県のように南北に長い土地であると、特定の場所に居場所を設置しても要支援者が集まらず、効果が薄くなる可能性がある。土地の制約を受けない SNS は、繋がることができる場所のとして効果的。もしもどうしてもリアルに作るならば、象徴的な場所で、昔の地域づくりのようなかたちで作ったらどうか。
・行政は、要支援者にとって最も適切な場所を確保することが苦手。相談を受ける側としては、要支援者が「支援を受けることが出来る場所を準備できていること」が強みになる。活用できる資源を準備出来ていれば、踏み込んだ相談対応が出来る。
・行政機関に繋ぐまでの中間地点のような居場所が重要。

・東京等の都市部に子どもたちが行ってしまわないための、三重県に繋ぎとめるための居場所が必要。

・行政は相談ハードルを下げる必要がある。

（具体な意見）

・今までの行政のやり方のような、相談場所を設置してただ待っているだけでは要支援者は相談に来ない。様々な取組（食料品、生活用品、コスメ品等の提供等）により、要支援者が相談しやすいようにする必要がある。
・行政の色を出すと要支援者は来ない。NPO が相談窓口を担うことは効果的。
・アウトリーチは今や必須。繁華街での夜回りは有効なアウトリーチの一つ。
・SNS 相談は相談ハードルを下げる手法の一つ。
・アウトリーチの一つとして、警察との連携によるネットパトロールを強化しては。

・その他

（具体な意見）

・若年層の生きづらさの内容を聞き取れる、同世代の支援者の育成も必要（10、20 代の学生、福祉系の大学生等）。
・NPO を育てるには、やりたい気持ちを自主的に持ってもらうことが重要。
・民間シェルターを早急に三重県で設置すべき。また、設置するならば、産前・産後の対応が出来るような機能も必要。
・望まない妊娠の年齢層が下がってきているため、中学校を卒業するまでの学校教育や啓発が重要。
・児相は子の問題しか見ない。親の問題なのか、子の問題なのか、という視点は大事。
・三重県には、相談を受け付けた後の受け皿が少ない。受け皿が少ないと相談を受ける側も二の足を踏むことがある。また、女性支援に特化した NPO もほぼ無い。
・三重県内の関係者全員で一度集まって現状や問題意識を共有すべき。
・三重県には都会のような繁華街が無く、街に子どもがいない。夜回り等の、都会と同じようなアプローチが出来ない。

【子どもたちの現状】

※NPO からの聞き取りを行ううえで、若年層の困難女性に代表される、子どもたちに関する意見が多く集まりましたので、集約しました。

（具体な意見）

・福祉に繋がっていない子どもたちは、周りの大人が心配するだけで、本人たちは悩んでいない場合が多い。
・支配的で権威的な行政を嫌う子どもが多い。
・子どもたち自身が福祉サービスを必要としていないため、行政に繋げることが出来ない場合が多い（子どもたちから助けを求められたら行政に繋ぐようにしている）。
・相談ハードルを下げて仲良くなると、悩みを聞くことが出来るようになる。
・子どもたちが最も悩みを打ち明けられないのは、その子どもたちの親（だから、要支援者となった子どもたちに「家に帰れ」という指導を行っても問題解決に繋がらない）。
・三重の子どもたちは夜行バスで安く東京や大阪に来てしまう。名古屋も近い。三重県内にたまり場が無いのか、軽い気持ちで都市部に出てきてしまう。都市部で友達を作り、そのまま都市部で生活を始めてしまう。SNS（X、TikTok、インスタ等）の動画等がそれを後押ししている（「都会は楽しそう」、「地元にいたくない」、「現実に戻りたくない」）。
・子どもたちは都市部で生活するために、友達と遊ぶために、身体を売っている。身体を売るような子どもたちは、障害かそうでないかのグレーゾーンの子どもが多い。グレーゾーンの子どもたちは、一見見た目が普通だが、一般常識が無く、情緒が不安定であり、社会生活が困難。グレーゾーンの子どもたちは障害と認定されないため、どこにも繋ぐことが出来ない。
・子どもたちが求めているのは、「友達」である（愛情不足や親からの虐待を受けている子どもたちが多い）。
・中高生の６割がオーバードーズ経験あり（厚労省調査）。クスリを辞めろと言っても響かないので、子どもたちと接し続けることで、子どもたちが自分で気づいた時に相談に乗るようにしている。
・普通の子がどこかでつまずいて（いじめ、家庭不和、引きこもり、虐待等）、「沼」にはまってしまう。沼から抜け出す手法として SNS は有効。
・若年層の困難を抱える女性は、衣食住を適切に備えることが困難。結果として、それらが完備された性風俗に流れていってしまう。
・中絶できずに「０日虐待で死亡」といったケースが増えており、予期しない妊娠をしてしまう子どもが増えてきている。
・子どもたちの悩みは表出化されるまで時間がかかる。時間をかけて寄り添う必要がある。
・そもそも、支援が必要な子どもたちに、支援に関する情報が正しく届いていない。